

## 第2 言語における動詞特性と格助詞習得の関係： 中国人日本語学習者を対象とした活動動詞におけることヲの習得

早川杏子（名古屋大学）

玉岡賀津雄（名古屋大学）

初相娟（天津外国語大学）

### 要旨

本研究は、動詞の意味的・統語的特性が格助詞の習得に影響するかどうかを確認するために、中国人日本語学習者を対象に、2種類の活動動詞に対することヲを含む四者択一式テストを行った。さらに、読解テストを使って、日本語能力を上・中・下位群に分けて統制した。第1に、助詞の習得に関わる変数として、日本語の読解能力（上・中・下位群）、活動動詞タイプ（物理動詞・精神動詞）、助詞タイプ（ニ・ヲ）を独立変数として、助詞の正誤を予測する分類木分析を行った。その結果、物理動詞は読解能力とともに助詞の正誤判断が正確になる傾向がみられた。一方、精神動詞は、読解能力が上がっても二格とヲ格の適切な選択判断は困難で、物理動詞に比べて両助詞の習得が遅れることがわかった。第2に、ことヲの代替誤用率でクラスタ分析を行ったところ、4つの動詞群のクラスタが見いだされ、動詞と格助詞の結び付きの理解が進んでいる動詞群とそうでない動詞群、ことヲならびにヲとニの代替誤用が多い動詞群に分類された。また、群のパターンから二格の理由・原因を示す機能への不十分な理解と二格を有生標識とする誤認がニの習得の遅れに関与していることが推察された。

### 1. はじめに

日本語の格助詞は、動詞に備わった意味的特徴や統語性によってどのような意味役割を持った助詞が結合されるかが決定される。同じ動詞であっても、「電車が動く」「電車を動かす」のように、話者が心象化した概念を表すには、異なる格助詞を用いなければ適切にその概念を表すことができない。日本語では、他の名詞との関係性を示すのに格助詞が用いられるが、英語や中国語など明示的な格標識を使わず、語順で主格、対格や与格が決まる言語も多い。格助詞の有無は、言語によって異なっているが、どの言語でも文においては、動詞が主要部（head）であり、動詞を中心に句が形成され、文を作る。

語彙概念構造（lexical conceptual structure）理論（影山, 1996, 2008）では、動詞には概念的・統語的な構造が備わっているとされている。そして、動詞語彙を中心とした意味的な項と補語関係をテンプレートで示している。例えば、「動く」という活動動詞であれば、[ ]x ACTまたは[ ]x ACT ON-[ ]yと示される。「動く」は、自動詞であり、主体 x がある行為や活動（ACT）することを示し、主語として「電車」を取り、「電車が動く」と表現されること

になる。他動詞の「動かす」の場合は、xがyに対して、ある行為や活動、働きかけをすることを示し、「太郎が机を動かす」と表現できる。その意味で、語彙概念構造理論という動詞語彙についてのテンプレートを個々の動詞の情報として記録していると言えよう。つまり、日本語母語話者であれば、動詞が意味・統語的に取る最適な句を示す格標識や補語に関する知識を持っていると想定される。そして、不適切な格標識や補語があれば、それを正しくないと判断する能力を有している。

それでは、語順によって主格、対格や与格が決まる第1言語（以下、L1）の話者は、格の標示によって格関係を決定する第2言語（以下、L2）の構文に対して、どのような情報をもとに日本語の格助詞の選択をしているのであろうか。L2 学習者の日本語の格助詞の選択が、動詞の持つ意味や統語に関する情報に依拠しているとするならば、目標言語の動詞と格助詞の習得の間には、強い相互関係がみられることが予想される。そこで、本研究では、格助詞の習得が動詞の習得とどのように関わっているかを検討するために、対格、与格などの格の標識の有無が L1 と日本語の間で必ずしも対応しない中国人日本語学習者を対象に、2 種の動詞群（物理的活動動詞・精神的活動動詞）を用いて、日本語の格助詞ニとヲの選択の適切さを検討した。

## 2. 動詞の意味・統語特性と格助詞の関わり

前章で述べたように、動詞の意味的・統語的特性の影響が、格助詞の習得に関与するかどうかを明らかにするのが本研究の目的である。調査対象の動詞には、運動性が内在する活動動詞を選定した。活動動詞において、格助詞は事象との関わりを規定するのに重要な役割を果たすからである。

活動動詞に関して、今井（2000）は、これらを3つに下位分類している。第1に、「物理的活動動詞」（以下、物理動詞）であり、「作る」「押す」「取る」など具体的な運動の中で捉えられる形や位置などの変化を伴う動詞である。第2に、「社会的活動動詞」であり、「もらう」「誘う」など、社会生活を営む上で人との関わりや人の存在が前提となる動詞である。これら2種の動詞は、動詞自身の語彙の意味が掴みやすく、名詞がヒト・モノ・トコロの違いによって格の意味と形式が決定される傾向がある（今井，2000）。第3に、「精神的活動動詞」（以下、精神動詞）であり、「驚く」「喜ぶ」「愛する」など知覚・感覚・感情・思考を表す動詞である<sup>1</sup>。

精神動詞は、意味が抽象的で具体的な運動としては捉えにくく、思考や感情など精神的活動の対象を表し、格としてはニとヲの両方が用いられる（今井，

<sup>1</sup> 今井（2000）の指す「精神的活動動詞」とは、人間の内面に働く感情や心理を表す動詞について扱った先行研究における「感情動詞」（工藤，1995；寺村，1982）、「情動動詞」（山岡，2000）、「心理動詞」（佐藤，1997；堀川，1992）などと呼ばれるものに相当すると考えられる。

2000)。例えば、「花子がミスに気付いた。」であれば、精神動詞「気付く」は、「ミス」を目的語として取るが、与格のニで示される。これを英語で表現すると Hanako realized [her] mistake. となり、格標識がないので、対格か与格かを表層で判断することは難しい。同様に、中国語では、「花子发现错误了。」と表現するが、やはりこの場合は明示的な格標識がない。他にも「あこがれる」「苦しむ」などニ格のみを許容する精神動詞は少なくない。

以上のように、精神動詞は、格標識に特徴的な統語的特性を持つ動詞である。L2 としての日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、語彙概念構造理論で主張されているような個々の動詞についての頑健なテンプレートを持っているわけではない。しかし、L2 の学習が脳内辞書に新たな語彙情報を記録し、再構築していく作業であると仮定するならば、習熟度が上がるにつれて、動詞語彙に関するさまざまな知識が脳内辞書に記載されていくと考えられる。そこで、読解力を日本語能力の総合的な指標として、日本語能力を上位・中位・下位群に分けた。そして、動詞の持つ特性と格標識の習得の関係を探明するために、活動動詞(精神動詞・物理動詞)と格助詞(ニ・ヲ)の習得の違いを日本語能力別に検討した。

### 3. ニ格・ヲ格の習得を対象とした先行研究

日本語学習者のニとヲの格助詞の習得に関する先行研究を概観する。

杉本 (1998) は、中級から上級レベルの中国語圏学習者の作文 (人数不詳) から、対象を表すニとヲを格助詞にとる動詞の誤用を抽出した。ニを使うべき助詞にヲを当てた誤用、ならびにヲを使うべき助詞にニを当てた誤りは、誤用数が多く、ヲの代わりにニを用いた誤用では、補語に人を表す語が多いことが指摘されている。ヲ格とニ格の代替的な誤用については、格助詞を扱った生田・久保田 (1997)、今井 (2000)、張 (2008)、美里 (2002) などの習得研究においても同様のことが指摘されている。

生田・久保田 (1997) は、格助詞の意味役割を細かく分類し、多国籍で構成される上級学習者 50 名を対象に、ニとヲを含めた 8 つの格助詞の穴埋めテストを行い、それぞれの助詞における誤答の割合を算出した。その結果、ニとヲの誤選択率は、対象を表す機能、特に感情を表す動詞の場合に高い傾向があったことが報告されている。今井 (2000) は、こうした心理感情を表す意味性を持つ動詞に対するニとヲの習得が、違った意味性を持つ動詞に比べて習得が困難であることを明らかにしている。今井 (2000) は、上級の中国人日本語学習者 45 名と韓国人日本語学習者 45 名の合計 90 名を対象に、格助詞の穴埋めテストを行った。精神的活動動詞および物理的・社会的活動動詞の 2 種類の動詞におけるニとヲの正答率 (2 種の動詞×2 種の助詞) の分散分析の結果は有意で、4 条件を比較した結果、最も正答率が高かったのは「物理的・社会的活動動詞+ヲ」で、次いで「物理的・社会的活動動詞+ニ」と「精神的活動動詞+ヲ」、そして最も正答率が低かったのは「精神的活動動詞+ニ」であった。

さらに、L1 の中国語と L2 の日本語の動詞句構造の違いから、ニとヲの代替誤用を探った研究がある。張 (2008) は、中国で日本語を学習する 2 年生から 4 年生の 173 名を対象に、二格をとる漢語サ変動詞に対する格助詞選択テストの誤答率を算出した。誤用を分析した結果、二格をヲ格とした誤りが多かった順に、態度の向かう対象 (例: 同情する)、その他 (例: 影響する)、移動の帰着点 (例: 命中する)、変化の結果 (例: 変色する)、成就判断の基準 (例: 失敗する)、一方的行為の向かう対象 (例: 自首する)、存在の場所 (例: 分布する) であった。張 (2008) によれば、「参加する」のように、対象にニをとる動詞は、中国語では SVO (主語・動詞・目的語) 構文を成すためにヲと標示してしまう誤りが頻繁にみられるが、「影響する」に関しては、他の SVO 構文を成す動詞に比べ、ヲ格の選択率は必ずしも高くないと報告している。これは、中国語の影響ではなく、特定の動詞の特性が影響していると考えられる。日本語学習者は常に対象の格関係を規定する L1 の句構造に従って L2 の格標識を選択しているのではなく、むしろ動詞によっては、目標言語の格関係や格範疇を考慮して助詞を選択していることが推察される。

日本語能力とニ・ヲの習得の関わりについては、美里 (2002) が能力別の分析を行っている。美里の研究では、英語・韓国語・中国語母語話者 54 名に対して助詞の穴埋めテストを行い、対象を表す格助詞が、ガ、ト、ニ、ヲのどの助詞に代替されるかを調査している。SPOT-A 版で日本語能力を上位 ( $n=11$ )・中位 ( $n=30$ )・下位群 ( $n=13$ ) に分け、群別に 54 の提示文の誤用率を算出して、分散分析を行っている。その結果、代替の誤用率 (ガ、ト、ニとすべきところにヲを当てた数の割合) に習熟度の差はみられなかった。つまり、日本語の習熟度と格助詞の習得には影響関係が見出せなかった。ニとヲの代替誤用だけを見ると、10 語「乗る・なる・慣れる・似る・答える・参加する・合格する・反対する・驚く・迷う」のうち後者の 6 語の動詞にヲを当てた誤りが多かったと報告している。ただし、美里 (2002) の調査には以下の点に問題がある。まず、対象者が初級レベルから日本の大学への進学を目指す上級レベルまでと日本語能力のばらつきが大きい。さらに、54 名の日本語学習者の母語が異なっており、日本語能力についてどのような母語を持つ学習者が集まっているかが分からない。

以上の先行研究の結果をまとめると、次のようになる。第 1 に、ニとヲが動詞の対象を示す場合に混同が起り、代替的な誤用が起きやすい。第 2 に、動詞が感情・心理などを表す性質を持っている場合、特に誤用が多くみられる。第 3 に、すべての動詞を L1 の句構造に対応させて L2 の格標識を当てているわけではなく、個別の動詞ごとに、格助詞の選択判断を行っている可能性がある。第 4 に、格助詞のニとヲの習得と日本語能力の関係は明確になっていない。

先行研究を概観して、日本語学習者の日本語能力と母語が統制されていないのがもっとも大きな問題点である。まず、張 (2008) を除いて、生田・久保田

(1997)、今井 (2000)、美里 (2002) では、被験者間の変数を入れずに複数の母語話者を一緒に分析しているため、母語の影響がさまざまに交錯し、L2 の格標識の習得に対する影響要因が特定し難い。また、美里 (2002) 以外は、日本語能力を測定していない。したがって、学習者の母語および L2 としての日本語能力の影響を考慮して、活動動詞とニとヲの格助詞の習得を検討しなければならない。

#### 4. 本研究の目的とデザイン

先行研究の問題点から、本研究では、対象者を単一の母語話者に限定し、読解テストを行って日本語能力で上位・中位・下位群に分けて、活動動詞（物理・精神動詞）と格助詞ニ・ヲの関係についての習得を検討する。今井 (2000) は、活動動詞を、社会的、物理的、精神的動詞の 3 つに分類している。本研究の焦点は、精神的活動動詞と格助詞との関係であり、その比較基準として使用頻度や(旧)日本語能力試験の配当級で、ほぼ等質の物理的活動動詞を選んで、比較検討することにした。なお、社会的活動動詞は、人と物を示す名詞句を取る三項動詞になることが多く、その場合は、有生性のコントラストが明瞭で、人が与格のニ、物が対格のヲを取ることが多いので、本研究の調査対象から除外した。まとめると、本研究の目的とデザインは次のようになる。語順で格関係が決まり、対格、与格を示す格の標識の有無が言語間で必ずしも対応しない中国語を母語とする日本語学習者を対象に、読解を基準とし日本語能力別に 3 群に分けて、精神的および物理的活動動詞の意味と統語的特性が、格助詞ニとヲの選択の判断に及ぼす影響を検討する。

#### 5. 調査方法

##### 5.1. 対象語の抽出と要因統制

本調査は精神および物理動詞の 2 種類につき、ニとヲの助詞を同数配置したデザインで、調査のターゲット文を作成した（本研究の調査文については附録を参照）。表 1 に示したように、精神および物理動詞を各 24 語（合計 48 語）選んだ。各動詞条件について、(旧)日本語能力試験（国際交流基金, 2002）の 1 級語と 2 級語を 24 語ずつ選んだ。また、和語と漢語で区別した場合にも、同数の 24 語ずつになるようにした。動詞の習得には、使用頻度の影響が想定される。そこで、物理動詞と精神動詞の使用頻度に違いがないように、各動詞の頻度を天野・近藤 (2000) 『日本語の語彙特性第 2 期 CD-ROM 版』で検索した。この使用頻度データベースは、1985 年から 1998 年までの 14 年分の朝日新聞記事から抽出した約 36 万語の語彙使用頻度を掲載したものである。

通常の使用頻度はベキ分布になるが、対数変換することで正規分布に近づけることができる(詳細は、朴・熊・玉岡, 2014)。使用頻度が統制されているかどうかを確認するために、まず底を 2 とする対数 ( $\log_2 X$ ) に変換した。動詞条件と助詞条件の対数変換した平均はほぼ同じであった（物理・ニの平均;

表 1. 精神・物理動詞に対応する格助詞および動詞の頻度・難易度

No.	格	動詞	語種	調査語	日能試	頻度	log <sub>2</sub> X
1	ニ	物理	和語	富む	1	2,379	11.22
2	ニ	物理	和語	群がる	1	679	9.41
3	ニ	物理	和語	埋まる	1	3,208	11.65
4	ニ	物理	漢語	命中する	1	522	9.03
5	ニ	物理	漢語	反射する	1	1,310	10.36
6	ニ	物理	漢語	逆行する	1	1,992	10.96
7	ニ	物理	和語	近づく	2	8,659	13.08
8	ニ	物理	和語	浮かぶ	2	6,493	12.66
9	ニ	物理	和語	もぐる	2	739	9.53
10	ニ	物理	漢語	位置する	2	10,076	13.30
11	ニ	物理	漢語	移動する	2	10,874	13.41
12	ニ	物理	漢語	伝染する	2	236	7.88
13	ヲ	物理	和語	摘む	1	667	9.38
14	ヲ	物理	和語	帯びる	1	2,668	11.38
15	ヲ	物理	和語	なめる	1	867	9.76
16	ヲ	物理	漢語	爆破する	1	2,943	11.52
17	ヲ	物理	漢語	封鎖する	1	2,054	11.00
18	ヲ	物理	漢語	短縮する	1	6,485	12.66
19	ヲ	物理	和語	たたく	2	6,331	12.63
20	ヲ	物理	和語	曲げる	2	1,145	10.16
21	ヲ	物理	和語	編む	2	770	9.59
22	ヲ	物理	漢語	刺激する	2	8,595	13.07
23	ヲ	物理	漢語	発射する	2	6,305	12.62
24	ヲ	物理	漢語	操作する	2	7,532	12.88
25	ニ	精神	和語	励む	1	1,977	10.95
26	ニ	精神	和語	挑む	1	4,671	12.19
27	ニ	精神	和語	甘える	1	704	9.46
28	ニ	精神	漢語	同情する	1	2,066	11.01
29	ニ	精神	漢語	動揺する	1	2,924	11.51
30	ニ	精神	漢語	興奮する	1	2,998	11.55
31	ニ	精神	和語	気づく	2	7,616	12.89
32	ニ	精神	和語	困る	2	13,636	13.74
33	ニ	精神	和語	あきれる	2	1,331	10.38
34	ニ	精神	漢語	苦勞する	2	7,939	12.95
35	ニ	精神	漢語	集中する	2	20,595	14.33
36	ニ	精神	漢語	迷惑する	2	5,798	12.50
37	ヲ	精神	和語	恥じる	1	594	9.21
38	ヲ	精神	和語	志す	1	1,136	10.15
39	ヲ	精神	和語	嘆く	1	4,029	11.98
40	ヲ	精神	漢語	確信する	1	4,535	12.15
41	ヲ	精神	漢語	痛感する	1	3,026	11.56
42	ヲ	精神	漢語	軽蔑する	1	131	7.03
43	ヲ	精神	和語	望む	2	17,845	14.12
44	ヲ	精神	和語	疑う	2	4,461	12.12
45	ヲ	精神	和語	あきらめる	2	3,271	11.68
46	ヲ	精神	漢語	信頼する	2	18,145	14.15
47	ヲ	精神	漢語	自慢する	2	2,546	11.31
48	ヲ	精神	漢語	反省する	2	14,104	13.78

注：「日能試」の数値は、旧日本語能力試験の配当級を示す。

$M=11.04$ ,  $SD=0.49$ , 物理・ヲの平均;  $M=11.39$ ,  $SD=0.49$ , 精神・ニの平均;  $M=11.96$ ,  $SD=0.49$ , 精神・ヲの平均;  $M=11.60$ ,  $SD=0.49$ ). 動詞条件(物理・精神)と助詞条件(ニ・ヲ)による  $2 \times 2$  の二元配置の分散分析を行った結果、主効果(動詞の主効果;  $[F(1, 44)=1.323, p=.256, ns]$ , 格助詞の主効果;  $[F(1, 44)=0.000, p=.998, ns]$ ) および交互作用  $[F(1, 44)=0.506, p=.480, ns]$  は有意ではなかった。

さらに、動詞の難易度の影響も考えられるので、1級相当語を1、2級相当語を2として、4条件で同じ難易度になるように統制した。平均はまったく同じで、物理・ニ、物理・ヲ、精神・ニ、精神・ヲの平均はすべて  $M=1.50$ ,  $SD=0.15$  であった。念のために、動詞条件×助詞条件間における動詞難易度の違いを二元配置の分散分析で検討した。その結果、主効果ならびに交互作用[動詞の主効果、助詞の主効果および両変数の交互作用はすべて  $[F(1, 44)=0.000, p=.998, ns]$  は有意ではなかった。

以上のように、精神・物理動詞とニ・ヲ格の  $2 \times 2$  の4条件において、使用頻度および難易度に違いはなかった。したがって、精神・物理動詞とニ・ヲの格助詞を変数として、テストの得点を直接比較することが可能である。

## 5.2. 格助詞テストおよび読解テスト

中国国内の東北地方・上海沿海部にある4つの大学で日本語を主専攻として学ぶ1年終了生から4年終了生の201名に対して、精神・物理動詞と対応した格助詞選択のテストおよび読解テストを実施した。格助詞テストは48問で、提示された文に最も適切な格助詞を1つ選ぶ方式とした。以下の例は、精神動詞の問題であり、4.「に」が正しい答えである。

問い みんながその事件の被害者( )同情した。  
1.が 2.で 3.を 4.に

また、本研究の調査目的がわからないよう、ニかヲ以外の助詞を問う錯乱文を10問加えて、テスト問題は合計58問とした。分析の対象とした問題は、錯乱文の10問およびさらに3問を除外して(理由は後述)、45問である。さらに、格助詞のテストの後で、日本語の読解テストを行った。このテストは、物語文・エッセイ・短い説明文(360字)・長い説明文(713字)の4つのテキストから成り、各テキストにつき4つの問いが設けられていた(計16問)。読解テストも、テキストの内容に最も適切な答えを選ぶ四択一方式とした。このテキストの文章難易度の目安として、日本語文章難易度判別システム alpha版<sup>2</sup>を使用して、「学習者文章評価(試験中)」で算出した。物語文では、文章

<sup>2</sup> 李在鎬氏・長谷部陽一郎氏・浅尾仁彦氏が読解教育支援のために開発・運用し、公開しているツールである。「日本語母語話者文章評価」と「日本語学習者文章評価」の2つ

難易度が上級前半で、リーダビリティ・スコアは 1.78、エッセイでは中級後半で 3.30、短い説明文は上級前半で 1.88、長い説明文は中級後半で 3.41 であった。これらの指標に基づけば、本研究の読解テストは中級から上級程度の難易度を持ったテキストであったといえる。

格助詞と動詞の習得の関係を明らかにするために、日本語能力の違いを要因として設定するべく、読解テスト (16 点満点、 $M=10.41$ ,  $SD=3.17$ ) を基に、平均から $\pm 1$ 標準偏差を境界として、201 名の中から上位群 ( $n=40$ , 14 点以上 16 点満点まで、 $M=14.55$ ,  $SD=0.59$ )、中位群 ( $n=42$ , 10 点から 11 点まで、 $M=10.45$ ,  $SD=0.50$ )、下位群 ( $n=51$ , 4 点から 8 点まで、 $M=7.12$ ,  $SD=1.15$ ) を抽出し、3 つの群に分けた。したがって、本研究の分析に使用したのは 201 名のうち、133 名のデータである。

## 6. 分析 1

### 6.1. 分析手法

これまで述べてきたように、中国人日本語学習者は、対格、与格の標識の有無が L1 と日本語の間で必ずしも対応しないため、精神・物理動詞と共起するヲ格 (対格) とニ格 (与格) の名詞句の区別が難しいのではないかと仮定した。また、日本語能力の向上と共に、こうした格助詞の習得も伸びるのではないかと考えた。そこで、格助詞の選択の正誤を予測する変数として 3 つの変数を想定した。第 1 に、精神動詞と物理動詞の違い、第 2 に、動詞に備わった統語的特性としてのニ格とヲ格の区別、第 3 に、総合的な日本語能力としての「読解」能力、である。これら 3 つの変数によって格助詞の正誤判断を予測する分類木分析 (classification tree analysis) を行った。分類木分析は、決定木分析 (decision tree analysis) の一種で (詳細は、玉岡, 2006; Tamaoka & Ikeda, 2010)、本研究の場合は、目的変数である格助詞の正誤に対して、動詞の種類、格助詞の種類、読解による上位・中位・下位群の 3 つの質的な説明変数が、有意な予測変数となりうるかという分析である。有意な予測変数は、その影響の強さおよび複数の変数の相互作用を含んで、樹形図によって上から下へ枝を伸ばすかたちで階層的に描かれる。予測変数とならない要因は、樹形図には描かれない。分析には、SPSS-PASW Statistic 18.0 を用いた。なお、分類木分析には CHAID (Chi-squared Automatic Interaction Detector) の手法を用いた。

### 6.2. 分析 1 の結果

本研究では、四者択一式のテスト問題においてニとヲの格助詞が適切に選択

に分かれている。本研究の対象者は日本語学習者なので、後者の評価を使用した。数値が大きければ相対的に易しいテキストであり、小さければ難しいテキストとなる。詳細は <http://jreadability.net/> を参照。



されているかどうかの正誤判断を、動詞タイプ（物理・精神動詞）、助詞タイプ（ニ・ヲ）、日本語の読解能力（上・中・下位群）の3つの独立変数で予測する分類木分析を行った。分析にあたり、選択肢から正答が一つに限定できないものが3文あったので、それらは分析から除外した（除外したターゲット文は、附録のターゲット文一覧上に\*印で示した）。したがって、分析のためのデータは、最終的に45文となった。データの入力は、ターゲット文に対して正しい助詞が選択できた場合は1、そうでなければ0と入力した。例えば、5.2で示した例文の場合、4の「に」を選んでいれば1（正答）、1～3の「が・で・を」を選んでいれば、0（誤答）である。正誤の総回答数は、5,985であった。分類木分析の相対リスクの推定値は35.1%、標準誤差は0.6%であった。

分類木分析の結果は、図1に示したとおりである。活動（精神および物理）動詞の二格あるいはヲ格の選択の正誤に対する予測は、第1に読解能力、第2に動詞の種類、第3に格助詞の種類であった。まず、上位・中位・下位群の順に、正答率が下がっていくことがわかった。次に、精神・物理動詞のタイプが強い予測変数となり、物理動詞のほうが精神動詞よりも格助詞が正しく選択されていた。最後に、物理動詞においては、助詞のタイプが習得の予測変数となり、二格に比べてヲ格のほうが正しく選択されることがわかった。しかし、精神動詞の場合には、枝が描かれず、助詞のタイプは有意な予測変数とはならなかった。言い換えると、精神動詞では、ニとヲの格助詞の正誤判断には有意な違いがなく、物理動詞でみられたようなヲ格の二格に対する優位性はみられなかった。以下、さらに詳細に検討する。

### 6.2.1. 読解能力の影響

読解能力が上位層のノードとなり、上位・中位・下位群にはつきりと枝が分岐した $[\chi^2=404.359, p<.001]$ 。上位群のニおよびヲの総合的な正答率は75.4%（ノード1）、中位群では53.6%（ノード2）、下位群では44.5%（ノード3）であった。以上の結果から、活動動詞と共起する格助詞のニとヲの習得には、日本語の読解能力が強く関わっていることが分かる。つまり、読解能力を一般的な日本語能力を指標であると仮定するなら、日本語の習熟度が上がるにつれ、動詞が要求する名詞句の格助詞の判断もより正確になっていくことが明らかになった。以下、読解能力別に結果を報告する。

### 6.2.2. 上位群における動詞と助詞の影響

上位群では、精神・物理の動詞タイプがニとヲの格助詞の正誤判断に強く影響した $[\chi^2=82.854, p<.001]$ 。枝分かれした動詞別の正答率は、物理動詞で84.9%（ノード4）、精神動詞で66.4%（ノード5）であった。両動詞の間に約20%の違いがみられた。さらに、助詞タイプの影響は限定的で、物理動詞の場合にのみ、ニとヲの正誤に差がみられた $[\chi^2=50.360, p<.001]$ 。正答率は、二格が75.5%（ノード11）で、ヲ格が92.7%（ノード10）であった。つまり、読

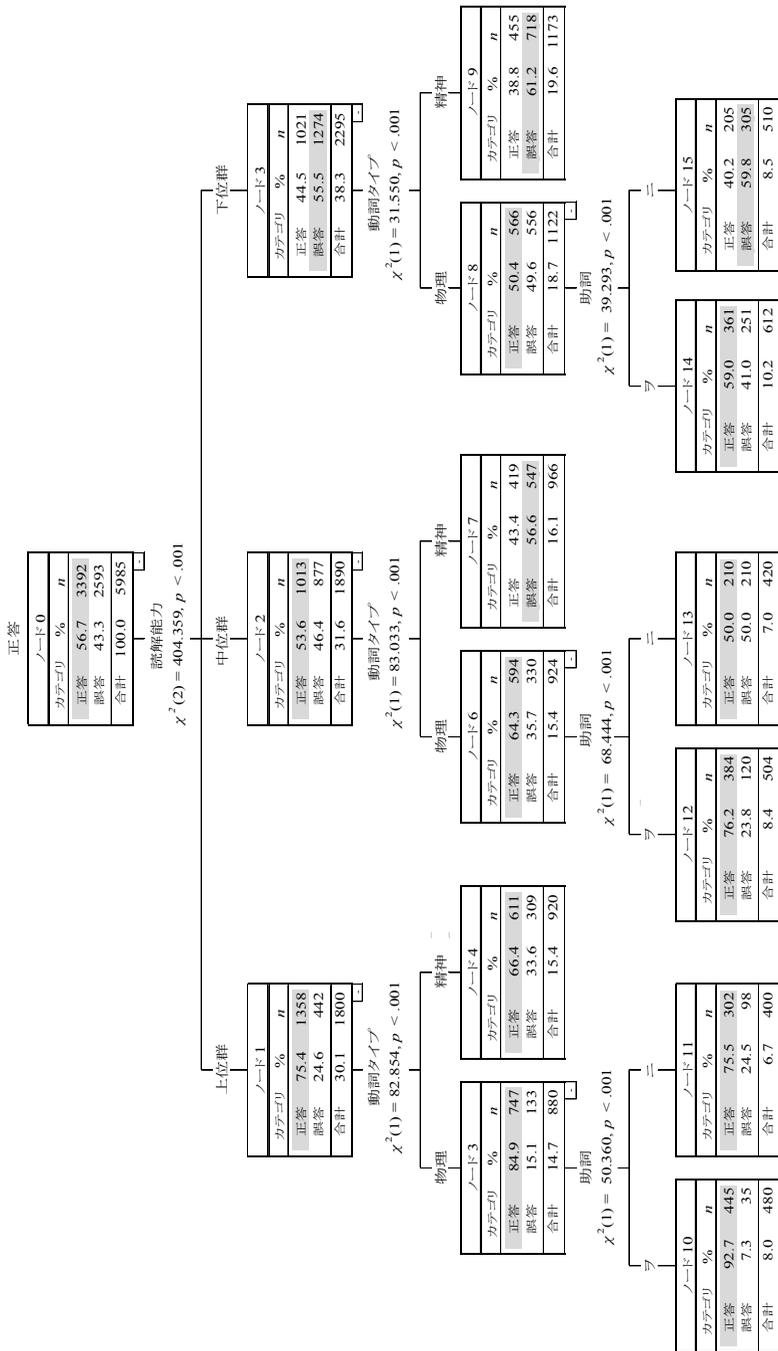


図1. 中国人日本語学習者による精神・物理動詞の二格・ヲ格の習得に対する影響要因を示した分類木分析の結果

解能力の上位群では、精神・物理動詞の違いが格助詞選択の正答率に強く影響し、物理動詞については、さらに格助詞のニとヲに違いがみられた。

### 6.2.3. 中位群における動詞と助詞の影響

中位群も上位群と同様の分岐を示し、動詞の種類の違いが有意に影響した [ $\chi^2=83.033, p<.001$ ]。正答率は大きく下がり、物理動詞が 64.3% (ノード 6)、精神動詞が 43.4% (ノード 7) であった。さらに格助詞のタイプの影響も上位群と同じで、物理動詞においてのみ、ヲ格とニ格の正答率に違いがみられた [ $\chi^2=68.444, p<.001$ ]。ヲ格は 76.2% (ノード 12)、ニ格は 50.0% (ノード 13) であった。読解能力の中位群は、上位群と同じく、精神・物理動詞の違いが強く影響し、物理動詞については格助詞のニとヲに違いがみられた。

### 6.2.4. 下位群における動詞と助詞の影響

下位群も上位・中位群と同様に分岐した [ $\chi^2=31.550, p<.001$ ]。物理動詞の正答率は 50.4% (ノード 8)、精神動詞では 38.8% (ノード 9) であった。格助詞のタイプの影響も、上位・中位群とまったく同じで、物理動詞においてのみ、ニ格とヲ格の正答率に違いがみられた [ $\chi^2=39.293, p<.001$ ]。

### 6.2.5. 分析1の考察

分析1の分類木分析の結果は、次のようにまとめられる。第1に、読解能力は、格助詞の習得に対して最も強く影響した。美里(2002)は、格助詞の習得と日本語能力の間には関係がみとめられなかったとしている。しかし、美里(2002)では、母語が英語・中国語・韓国語とばらばらで、どの母語の学習者が、どれぐらいの日本語能力を持っていたか不明である。そのため、統制がとれていない雑多な日本語学習者集団であるといえよう。本研究では、対象者を中国語母語話者に限定し、読解テストによって日本語能力を判定した上で、上位・中位・下位群それぞれのニ・ヲの格助詞選択の適切さを調査した。それによって、これらの助詞が担う対格・与格の標識の有無が L1 と L2 の日本語の間で必ずしも対応しない中国語母語話者のニとヲの格助詞習得に対する日本語能力の影響を明確に示すことができた。

第2に、動詞の意味特性が格助詞の習得に影響した。物理動詞のほうが精神動詞よりも助詞の正答率が高かった。しかも、精神動詞はニとヲの正答率に差がなかった。本調査文におけるヲ格条件は、すべて作用を受ける対象を示したものである。一方、ニ格条件では、文によって対格・与格、さらに場所格など、さまざまな意味役割を担っていた。機能面からみれば、ヲ格の機能は単一であるため、当然複数の意味役割を示すニ格よりも易しいと考えられ、動詞のタイプを問わず同様にヲ格のほうがニ格よりもよくできているはずである。しかし、実際は、精神動詞はニとヲで枝は分岐せず、両助詞の判断は曖昧になっている。このことは、精神動詞の指し示す対象を標識化する際にヲ格が選ばれ

ない何らかの理由が存在することを示している。

第3に、上位・中位・下位群を通じて、物理動詞においてのみ、二格とヲ格の正答率に有意な違いがみられた。図1に最も下の階層で示した二格は、読解能力の上位、中位、下位群と能力が下がるにつれて、正答率も低くなっていく。上位群は正答率が75.5%、中位群では、正答率と誤答率がちょうど50%であり、下位群では正答率が誤答率を下回って40.2%である。物理動詞が二格を要求する場合、場所・位置・方向・着点の機能を担うことが多い。これは、対象が作用を受ける際の変化に物理的な空間が関わってくるからだと考えられる。二格は場所と位置を示す役割を担うが、デ格が同じような機能を持つこともあり、二は習得が難しい格助詞の一つだとされている(迫田, 2001; 蓮池, 2004; 初・玉岡・早川, 2013)。なお本研究では、場所や位置等の機能をもつデ格は選択肢から外すか、選択肢にあった場合、日本語母語話者でもゆれがみられたので、それらの問題は分析から除外した(附録の\*印を参照)。ヲ格に関しては、上位群が92.7%、中位群が76.2%、下位群が59.0%と、読解能力が上がるにつれて正答率が上がっていく。どの群でも二格の正答率を上回っており、やはり機能が豊富な二格に比べてヲ格のほうが機能がシンプルなだけあって、習得が進み易いのだと考えられる。生田・久保田(1997)や、今井(2000)においては、精神動詞は二格の習得が困難であると指摘されたが、本研究の結果では、精神動詞は二格・ヲ格ともに正誤判断が困難であり、2つの助詞の選択に混乱がみられた。そして、その誤りは、上述した第2の理由から、対象を示す機能において起こることが推察される。先行研究でも、二とすべき格にヲを代替的に用いる誤りが指摘されており(生田・久保田, 1997; 杉本, 1998; 張, 2008)、これについてさらに分析を行う必要がある。そこで、分類木分析では解明できなかった二とヲの代替の誤用と、個別の動詞における格助詞の結束化のパターンを確認するために、類似性のパターン抽出を行いグループ化する階層的クラスタ分析で、どのような動詞に代替誤用が起きやすいのかを検討することにした。

## 7. 分析2

### 7.1. 分析手法

精神動詞において、二とヲが代替された誤用のデータを用いた。精神動詞のターゲット24文において二またはヲ格が正しく選択されたデータ群(二→二、ヲ→ヲ)と、二あるいはヲとすべきものを逆に代替させた誤答(二→ヲ、ヲ→二)のデータ群に分けて、それぞれの総数を全被験者数で割った選択率を算出した。階層的クラスタ分析に際し、クラスタ間の距離にはウォード法を使用し、この2つのデータには平方ユークリッド距離の測定を用いた。

### 7.2. 分析2の結果

クラスタ分析の結果、2ポイントを基準にすると、4つの分類が見出され

た。この分析で得られた 4 つの分類が適切であるかどうか、正準判別分析を行ったところ、第 1 正準判別関数では、正準関数が 0.962 (固有値が 12.343、分散の 89.9%を説明、Wilks のラムダは 0.031,  $p < .001$ )、第 2 正準判別関数では、正準関数が 0.761 (固有値が 1.380、分散の 10.1%を説明、Wilks のラムダは 0.420,  $p < .001$ ) であり、いずれも有意であった。また、4 つのクラスタを分類した場合の的中率を交差妥当化で検討したところ、100%が適切に分類されており、これら 4 つの分類が妥当であることが保証された。

図 2 に精神動詞の格助詞選択の正答率と代替誤答率の散布図を描いた。X 軸が正しく選択されたニとヲの正答の割合、Y 軸がニとヲが代替された誤用の割合を示している。クラスタ分析の分類をわかりやすくするために、この散布図に 4 つのクラスタを重ねて示した。クラスタ I、II、III、IV の順に、正答率は下がり、代替された誤用も増えていく。以下に、各クラスタの傾向について詳細に考察する。

### 7.3. 分析 2 の考察

クラスタ I は、動詞と格助詞の結び付きの理解が進んでいるグループである。このグループに分類された項目は、「集中する・迷惑する・反省する・望む・あきらめる」の 5 つであった。正答率が 70~80%と高く、代替誤用率も 10~20%と低い。ニが正しいものは、「集中する・迷惑する」、ヲが正しいものは、「反省する・望む・あきらめる」で、特に助詞の偏りはない。また、L1 の中国語との句構造と対照してみると、SVO 構文をとるものは、「反省する・望む・集中する・あきらめる」の 4 つで、ニをとる「集中する」も、中国語では、「弟弟很少见地集中精力学习 (直訳すると、「弟がめずらしく精力を集中して勉強している」となる)。」のように「集中する」に対する「精力」は対格となるはずなので、ヲ格を選びそうところであるが、実際には、適切にニ格が選ばれている。張 (2008) の指摘にあったように、必ずしも L1 の中国語の句構造に対応する助詞が選択されているわけではないようである。

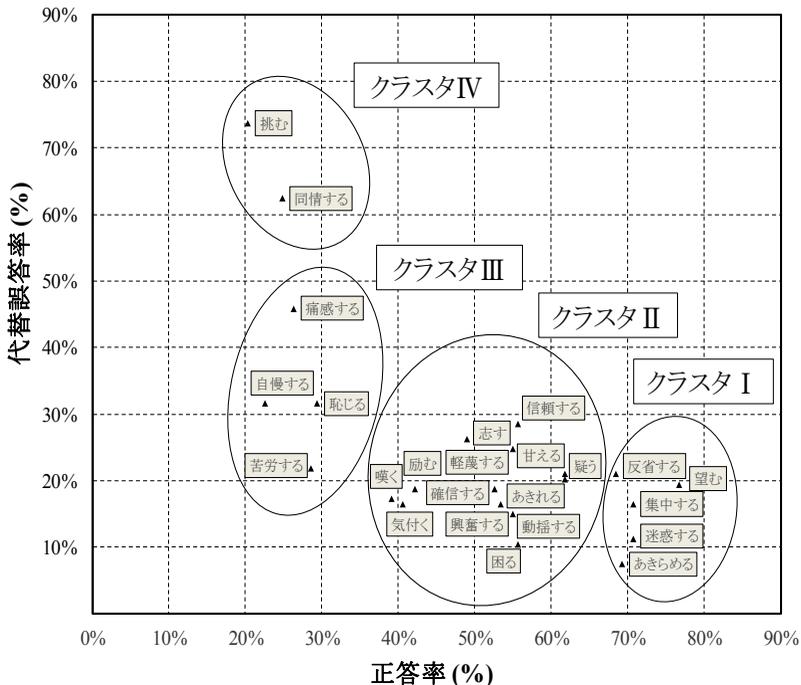


図2. 精神動詞の格助詞選択の正答率と代替誤答率の散布図

クラスタ II は、助詞が規定できていないグループである。ここに分類された項目は、「興奮する・動揺する・困る・気付く・励む・甘える・信賴する・確信する・軽蔑する・志す・嘆く・疑う・あきらめる」の 13 項目であった。正答率が 40～60% であるが、代替誤用率は 10～30% とそれほど高くはない。このことは、ニとヲ以外の助詞にも回答がばらついていることを示している。ニが正しいものは、「興奮する・動揺する・困る・気付く・励む・甘える・あきらめる」、ヲが正しいものは、「信賴する・確信する・軽蔑する・志す・嘆く・疑う」で、クラスタ I と同様、特に助詞の偏りはない。ただ、特徴的なのは、ニが動詞の意味作用が働く起因・理由として示される標識であったものが多く含まれていることである。精神動詞に対する助詞の選択がばらつく背景には、精神動詞とニの結合が理由／原因・対象という 2 つの意味役割を担うことで、学習者がニの機能に対する知識不足や誤解によって、特定の助詞との混乱が起こっている可能性が示唆される。

第 1 に、理由・原因を表すニ格に対する不十分な理解である。精神動詞は、心理的な変化が生じた理由や原因を示すためにニ格を伴うことが多い。「彼は彼女からの突然の別れに動揺した。」のように、「動揺」という心理的变化が生じたのは背景に「別れの宣告」があるからである。しかし、そのほかに理由・

原因を表す格助詞にはデ格があり、理由・原因としての二格の用法の習得をより困難にさせるのは、このことと無関係ではないと思われる。本調査では、デが同様の機能を持つことを踏まえて、理由・原因を表すニが正答の項目には、選択肢に「へ」や「カラ」など別の非適格の格助詞を用い、デを選択肢から排除してあった。したがって、精神動詞の二格の選択にあたっては、本調査においてデとの混同という条件は生じないはずである。学習者が理由・原因を表す格助詞がデしか思い当たらず、それを選ぶ選択肢がほかになかったとすると、回答がばらついた理由も説明できる。この反例としては、クラスタ I に分類された「迷惑する」が挙げられよう。「迷惑する」+ニの正答率は 70%を超えている。理由を表すニの機能は中国語では「因为～而…」という文法形式で表される。中国語では「这附近的居民、因为非法停车而感到很麻烦（このあたりの住民は、違法駐車している車に迷惑している）。」となり、クラスタ II の「興奮する」、「信頼する」等も同様の形式である。ただ、「迷惑する」の場合は、動詞の頻度が高く、教科書にも「人に迷惑をかける」の形でよく登場し、二格と動詞が固まりで記憶化されている可能性も高い<sup>3</sup>。そのため、ニを理由・原因を表す意味役割として正しく理解し、選択されたとは断定できない。そう推定すると、指導では、精神動詞の意味作用が働く理由・原因としてニが使用されることを明示的に教えることが重要であろう。

第 2 に、対象を標示する助詞に対する有生性の影響である。精神動詞では「被害者に同情する」のように対象を示すのにニが用いられるもの、「男を疑う」のようにヲが用いられるもの、2 つのタイプがある。この中で、ヲが正しいにもかかわらず、ニを当てた 6 つの項目のうち、前置名詞が人であったもの<sup>4</sup>が「信頼する・志す・軽蔑する・疑う」の 4 つあり、有生性と二格を固まりで結束化させているような傾向がみてとれた。精神動詞は、感情や心理を表す動詞であるため、人との共起が多くなる。したがって、有生名詞と結びつくことが多い。冒頭で述べたように、社会的活動動詞（例：もらう）のような三項動詞には有生性が明らかかなものがある。その与格標識には二格が用いられるが、精神動詞の問題文にもいくつか有生名詞が使われていたので、こうしたパターン化から、学習者は有生名詞と二格を結束させてしまったのかもしれない。対象を示す標識にはニとヲの 2 つがあり、どちらを用いるべきかは有生性では決まらないことを明示的に教えておく必要がある。

なお、L1 との句構造との対照で、二格で SVO 構文をとるものは、「励む・気付く」の 2 つで、どちらもヲ格との代替誤用率は 20%に満たない。したがって、これらも母語の句構造が強く反映しているとはいえないようである。

<sup>3</sup> 迫田 (2001) は、位置名詞 (例：後ろ) には「に」、場所名詞 (例：食堂) には「で」というように、隣接する特定の名詞と助詞を固まりにした「ユニット形成のストラテジー」と呼ぶ日本語学習者の記憶化方略が、誤用を生む原因だとしている。

<sup>4</sup> 本研究では、人間社会における社会的関係や立場を表す名詞も準有生名詞として扱った (例：仲間、医者、被害者)。

クラスタ III に分類された項目は、「痛感する・自慢する・恥じる・苦勞する」の4つであった。これは、ヲをニとする誤りが多いグループである。この正答率は30%以下と低く、代替誤用率が20~50%と幅があり、ニが正しいものは、「苦勞する」、ヲが正しいものは、「痛感する・自慢する・恥じる」で、ヲ格をとるものが多かった。L1 との句構造と対照してみると、SVO 構文をとるものは、「痛感する・自慢する」の2つで、他の2つは理由を表す構文で表される。母語の構造には一貫した共通性がみられないと考えると、L2 として日本語を処理する過程における難しさが関与しているのではないかと推察される。「力不足を痛感する」「自分を恥じる」「生活に苦勞する」の3つは、助詞に前置される名詞の意味がいずれも抽象的で、動詞の活動性や意味作用の範囲、その対象性を積極的に捉えにくい。ターゲット文の名詞と動詞の意味的結合が抽象的な事象を表す場合は概念化が難しい(今井, 2000)。その結果、意味的にも統語的にも不適格な格標識を選んでしまうのではないかと考えられる。

クラスタ IV に分類された項目は、ニをヲとする誤りが多いグループである。項目は「挑む・同情する」の2つであった。正答率が30%以下と低い点はクラスタ III と同じだが、代替誤用率が60~70%と高い。この2つの動詞の特徴は、L1 でも SVO 構文を成すのに加えて、対象にニ・ヲのどちらの格も取りうることである。日本語では、心理・感情を表す動詞は、目的語に二格構文を作るもの、二格・ヲ格の両用が可能なものが存在することがすでに指摘されている(寺村, 1982; 今井, 2000)。例えば、「勝負に／を挑む」のどちらも可能だが、本研究の調査文「その選手は世界新記録に挑むために厳しい訓練を続けている」のようなものには「新記録を挑む」のように、ヲは取れないという意味的な制約が生じる。「同意する」でも、「撤回に／を同意する」は許容されるが「誓約書に／\*を同意する」のような例は許容されない。これらは対象に両方の格をとりうるが、意味上の制約も存在するため、L2 の動詞の知識が豊かになっても、適切な格選択は非常に困難な項目であると推察される。こうした精神動詞の対象をヲで表しにくい条件について、杉本(1998)は、対象の具体性を挙げている。

- a. 太郎は必至で痛み {に／を} 耐えた。
- b. この家なら震度5の地震 {に／\*を} 耐えます。(杉本, 1998, p. 161)

ただし、杉本(1998)は、具体性という条件についてはさらなる考察が必要であり、一般化はできないとしている。このような特別な動詞については暗示的な学習では習得が難しいので、明示的な指導が必要であろうが、さらに言語学的な知見をふまえたうえで考えていかねばならないであろう。

## 8. 総合考察

本研究は、格助詞の習得が動詞の特性と深く関わっているかどうかを明らかにするために、対格、与格などの格の標識の有無が L1 と日本語の間で必ずしも対応しない中国人日本語学習者を対象に、格助詞の正誤判断が動詞の特性によって決定されるかどうか、2つの分析を通して検討した。

分析1の分類木分析の結果、日本語の読解能力、動詞の種類、助詞の種類が、活動動詞である物理・精神動詞における格助詞ニとヲの習得の予測要因となることが明らかになった。さらに、分析2のクラスタ分析の結果、精神動詞のニとヲの正誤判断の困難さに影響するのは、動詞の意味的・統語的な特性が関わっていることが推察された。以下に、2つの分析から得られた結果をまとめ、動詞の特性の観点から、格助詞の習得との関連について総合的に考察する。

まず、動詞の意味的な特性による影響を考察する。L2 の日本語能力が上がるにつれ、格助詞の習得が進んでいく。物理動詞については、ヲ格が二格に先行して習得される。これは、ヲ格の機能が対象・経路のみで、多様な機能をもつ二格に比べ、使用上の混乱を招き難いからであると考えられる。また、物理動詞は、対象が作用を受ける場所や位置などの結束性が強く、空間を示す格助詞を要求する意味特性を持つ。その意味役割を負うのは、二格とデ格の2つの格助詞である。二格の習得が遅れるのは、類似した機能を持つ格助詞が複数あるために学習者が混同するためだと考えられる。精神動詞においては、日本語の習熟度が上がっても、二格とヲ格の混乱がみられる。精神動詞は感情や心理の変化を表すので、人間に関する語との結束性が強く、変化の理由や原因を示す格助詞を要求する意味特性を持つ。しかし、その機能を担う格はやはりニとデの2つがあることが習得を困難にさせる1つの理由になっている可能性がある。また、もう1つの可能性としては、三項動詞の与格として用いられることの多い二格を、有生名詞を受ける格として学習者が捉えているケースである。クラスタの分類(クラスタII)で、有生名詞にヲとすべきものにニを当てた誤用が多い傾向から、少なくともそうした捉え方をしている学習者がいることが示唆される。さらに、精神動詞は、対象に抽象的な語が多く、動詞の作用が及ぶ先や範囲に対する概念化が難しいという意味特性がある。そのため、対象を示すヲ格でさえも、適切に選択することができない傾向がある(クラスタIII)。

次に、動詞の統語的な特性による影響を考察する。精神動詞には、目的語に二格構文を作るもの、二格・ヲ格の両用が可能なものが存在し(今井, 2000; 杉本, 1998; 寺村, 1982)、後者には何らかの使用制約が生じる。精神動詞において、ニとヲのどちらが適切なのかを判断する条件は、日本語母語話者でさえ意識化することは難しい。日本語学習者では、なおさら判断が難しいのは当然であろう。日本語母語話者の場合、目的語に二格をとる特定の動詞については、脳内のレキシコンに格と動詞の結束関係についての情報が記載されている

と考えられるが、日本語学習者は特定の動詞が決まった格標識と結びつくという情報は、学習を経なければ得ることができない。もしそうした学習がなければ、目的語（対象）を示す格標識として、ヲ格を選んでしまう可能性が高い。実際、本研究でも、いくつかの動詞でニとヲの高い代替誤用がみられた（クラスタ IV）。このことから、ニ格・ヲ格の両用が可能で、何らかの意味的な使用制約が生じる動詞については、指導に役立てるために、共起条件についてのさらなる検討が求められる。物理動詞に関しては、特に統語的な制約がないので、精神動詞に比べて、格助詞の習得が進みやすいのだと考えられよう。

語彙概念構造理論（影山, 1996, 2008）では、動詞に概念的・統語的な構造の情報が備わっていると考えており、動詞が格を決定付けることは、この理論からも支持される。また、日本語学の方面でも、動詞と格助詞の習得に関連があることは以前から指摘されている（寺村, 1982; 森田, 1973）。その意味で、本研究の主張は、さして目新しい主張ではないと思われるかもしれない。しかし、L2 の日本語の格助詞習得の研究を概観すると、動詞の諸特性と助詞習得の関連に着目し、統制された条件で検討した研究は、管見の限り、今井 (2000)、初・玉岡・早川 (2013) くらいに過ぎず、先行研究では、L2 として格標識を習得していく過程でどのような要因が働くのかを解明するには、さまざまな条件が混在していた。本研究は、それらを整理し統制したことで、動詞の意味および統語的な特性の要因が、助詞の習得に強く影響していることを明らかにすることができた。さらに、中国人日本語学習者のニ格の習得の様相は、個々の動詞においては L1 の句構造規則を離れ、名詞と動詞の意味的結合から助詞を選択しようとする傾向がみてとれた。このことから、中国人日本語学習者は、日本語の学習を通して、L2 日本語の格助詞の機能性に対する知識を発達させていると考えられる。

## 9. 今後の課題

本研究は、動詞が求める格助詞の習得を明らかにすることが目的であった。そのため、動詞とニとヲの共起関係に関する検討にとどまり、格の意味役割や統語的な格標識などの観点からの統制はしなかった。しかし、類似した意味特性をもつ精神動詞内で、同じようにニが共起していても、意味役割や統語的特性が異なると、正答率にも違いがみられた。このことから、今後は対象格、場所格、原因・理由格など、助詞の機能を統制して調査を行えば、さらにニ格の習得の様相がみえてくるであろう。また、ニとヲの両形式が日本語母語話者に許容される精神動詞があり、これらの情報がレキシコン内でどのような結合価となっているのかも明らかにしていく必要がある。

## 謝辞

調査に協力してくださった学生の皆さんおよび先生方、詳細にわたり貴重なコメントをくださった査読者の方々に、心より感謝申し上げます。

## 参照文献

- 天野成昭・近藤公久 (2000). 『日本語の語彙特性 第2期 CD-ROM版』東京：三省堂.
- 生田守・久保田美子 (1997). 「上級学習者における格助詞『を』『に』『で』習得上の問題点—助詞テストによる横断的研究から—」『日本語国際センター紀要』7: 17-34.
- 今井洋子 (2000). 「上級学習者における格助詞『に』『を』の習得—『精神活動動詞』と共起する名詞の格という観点から—」『日本語教育』105: 51-60.
- 影山太郎 (1996). 『動詞意味論—言語と認知の接点—』東京：くろしお出版.
- 影山太郎 (2008). 「語彙概念構造 (LCS) 入門」『レキシコンフォーラム』4: 239-264.
- 工藤真由美 (1995). 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』東京：ひつじ書房.
- 国際交流基金・日本国際教育協会 (2002). 『日本語能力試験出題基準 改訂版』東京：凡人社.
- 迫田久美子 (2001). 「学習者の誤用を産み出す言語処理のストラテジー(1)場所を表す『に』と『で』の場合」『広島大学日本語教育研究』11: 17-22.
- 佐藤響子 (1997). 「二格名詞句をとる心理動詞」『横浜市立大学論叢 人文科学系列』48(2・3): 117-138.
- 杉本妙子 (1998). 「対象を表す格助詞『を』も『に』もとる動詞少考—日本語学習者の誤用を手がかりにして—」『佐賀大國文』26: 158-169.
- 玉岡賀津雄 (2006). 「『決定木』分析によるコーパス研究の可能性：副詞と共起する接続助詞『から』『ので』『のに』の文中・文末表現を例に」『自然言語処理』13(2): 169-179.
- 張善実 (2008). 「漢語動詞の二格構文に関する誤用調査—中国人日本語学習者を対象に—」『言葉と文化』9: 205-220. 名古屋大学国際言語文化研究科.
- 寺村秀夫 (1982). 『日本語のシンタクスと意味 I』東京：くろしお出版.
- 蓮池いずみ (2004). 「場所を示す格助詞選択のストラテジー」『言葉と文化』5: 105-117. 名古屋大学国際言語文化研究科.
- 初相娟・玉岡賀津雄・早川杏子 (2013). 「中国人日本語学習者の場所を表す格助詞『で』と『に』の習得に影響する諸要因」『日中言語研究と日本語教育』6: 59-70.
- 朴善嫻・熊可欣・玉岡賀津雄 (2014). 「同形二字漢字語の品詞性に関する日韓中データベースの概要」『ことばの科学』27: 3-23. 名古屋大学言語文化研究会.
- 堀川智也 (1992). 「心理動詞のアスペクト」『北海道大学言語文化部紀要』21: 187-202.
- 美里晶子 (2002). 「日本語学習者における対象を表す格助詞の選択に関する研究—『を』の使用調査に基づいて—」『中国四国教育学会 教育学研究紀要

第2部』48: 335-340.

森田良行 (1973). 「日本語動詞における格支配と意味」『早稲田大学語学教育研究所10周年記念論文集』, 284.

山岡政紀 (2000). 『日本語の述語と文機能』東京: くろしお出版.

Tamaoka, K. & Ikeda, F. (2010). Whiskey, or Bhiskey?: Influence of first-element and dialect region on sequential voicing of *shoochuu*. *Gengo Kenkyu* (言語研究), 137, 65-79.

日本語文章難易度判別システム alpha 版 <http://jreadability.net/>

附録 本調査に用いたターゲット文一覧

助詞・動詞	ターゲット文	中国語訳
ニ	この国は石油やガスなどの天然資源(に)富んでいる。 蟻が地面に落ちた砂糖菓子(に)群がっている。 先週、長い間土(に)埋まっていた古代遺跡が発見された。 警官が打った弾が犯人の足(に)命中し、犯人は足を押さえて倒れた。 * 太陽の光が鏡(に)反射してまぶしい。 今さら石炭をエネルギーに使うなんて、世の中の流れ(に)逆行している。 大きな貨物船がゆづりと港(に)近づいてきた。 観光客の捨てたゴミが海(に)浮かんでいるのを見ると悲しくなる。 * その島の子どもたちは海(に)もぐって上手に魚をとる。 太平洋の南(に)位置するこの島の人々は、昔ながらの生活を守って暮らしている。 作成したデータはUSB(に)移動すれば持ち歩けます。 ウイルスが動物から人(に)伝染するのを防ぐために、新薬の開発が進められている。	这个国家富有石油、天然气等天然资源。 蚂蚁们聚集在落在地上的糖块附近。 长久埋在土里的古代遗迹上周被发现了。 警察打出的子弹打中了犯人的腿，犯人捂着腿倒下了。 太阳光反射在镜子上，很耀眼。 现在才想用煤炭做能源，真是逆世界潮流。 大型货船慢慢靠进港口。 看到游客们扔的垃圾漂在海面上，真是痛心。 那个岛上的孩子们善于潜水捕鱼。 位于太平洋南侧的这个岛上的人们，一直坚持着原来的生活习惯。 做好的数据转移到USB里，可以随身带。 为防止病毒通过动物传染给人，一种新药的研发正在进行。
ヲ	子ども達が野原で花(を)摘んでいる。 湿気(を)帯びた風が南から吹いてきた。 犬がベロベロと私の顔(を)なめたので、くすぐったかった。 その爆弾は厚さ1メートルのコンクリートの壁(を)爆破することができます。 犯人は車で逃走したため、警察は道路(を)封鎖し、犯人の逮捕に全力を挙げた。 仕事のやり方を変えたら、労働時間(を)短縮することができた。 誰かがトントンドア(を)たたいた。 この工場では、金属の板(を)曲げて加工し、いろいろな製品を作っている。 姉は恋人のためにセーター(を)編んでいる。 料理のいいしそなにおいしは、人の食欲(を)刺激する。 あの基地では、ミサイル(を)発射する軍事訓練が行われている。 この機械(を)操作するには、一定の訓練が必要である。	孩子们在野地里摘花。 带着湿气的风从南边吹来。 狗舔着我的脸，很痒。 据说那个炸弹可以爆破厚度1米的混凝土墙。 由于犯人开车逃走的，所以警察封锁了道路，全力追捕犯人。 改变工作方法，缩短了劳动时间。 有人咚咚地敲门。 这个工厂，把金属板弯曲进行加工，制作出各种各样的产品。 姐姐给男朋友织毛衣。 饭菜香香的味，刺激人的食欲。 那个基地在进行发射火箭的军事训练。 要操作这个机器，需要接受一定训练。
ニ	彼は朝から晩まで研究(に)励む日々を送っている。 その選手は、世界新記録(に)挑戦するために厳しいトレーニングを積んできた。 子供は母親(に)甘えがたもつた。 みんながその事件の被害者(に)同情した。 彼は彼女からの突然の別れ話(に)動揺した。 彼はあまりのうれしさに(を)興奮して、そこらじゅうを走り回った。 私は家に帰ってすぐに、会社に財布を忘れてきたこと(に)気付いた。 彼は小さい頃からずっとお金(に)困らない生活をしてきた。 私は彼のわがままな考え方(に)あきれ何も言えなかった。 画家を目指している彼は、生活(に)苦勞しながら絵を描き続けている。 めずらしく弟が勉強(に)集中している。 このあたりの住人は、違法駐車をしている車(に)迷惑している。	他每天都从早到晚努力研究。 那个选手为了挑战世界纪录，一直坚持着艰苦训练。 孩子想向妈妈撒娇。 大家都同情那个事件的受害者。 由于她的突然要分手，而不安。 他过于高兴而兴奋，竟围着那里跑起来了。 我一回到家，立刻就发现把钱包忘在了公司了。 他从小时候起就一直过着不为钱发愁的日子。 我对他的任性的想法很吃惊，什么也没说。 向往着当画家的他，一边过着苦日子，一边坚持画画。 弟弟很少见地集中精力学习。 这附近的居民，因为非法停车而感到很烦恼。
ヲ	彼は人に頼ってばかりいた自分(を)恥じた。 彼は医者(を)志して猛勉強している。 不運(を)運いてもしかなかった。 誰もがそのチームの優勝(を)確信していた。 初めて一人で仕事を任されたが、失敗(に)初めて自分の力不足(を)痛感した。 この会社で働く多くの人たちが、労働条件の改善(を)望んでいる。 警察は被害者と関係のあった男(を)疑っている。 簡単に夢(を)あきらめてはいけない。 仲間(を)信頼しているからこそ、どんなことでも言い合える。 父は買ったばかりのカメラ(を)自慢した。 * 前回の失敗(を)反省し、成功するためにどんなことをすればいいか考えた。	他为自己一直依靠别人而感到羞愧。 他立志要当医生，在拼命学习。 感叹不幸毫无意义。 无论谁都相信那个队会胜。 第一次被委任工作，总失败，深深感到自己能力不足。 这个公司的很多人都希望改善劳动条件。 警察怀疑和被善人有联系的那个男人。 不要轻易放弃梦想。 正因为相信朋友，才任何事都可以互相倾诉。 爸爸炫耀自己刚买的照相机。 反省上次的失败，思考要成功怎么做才好。

注1: 左欄は日本語のターゲット文、右欄はその中国語訳である。

注2: ( ) 内は文に入る正しい助詞、下線は適切な格助詞の選択を求めた動詞であることを表す。

中国語訳で日本語の動詞に品詞が対応しない場合は、動詞の意味に対応する句に下線を示した。

注3: \* は決定木分析から除外した項目を示す。

## Second language acquisition of case particles in relation to verbal features: Acquisition of particles *-ni* and *-o* with active verbs by native Chinese speakers learning Japanese

Kyoko HAYAKAWA, Nagoya University

Katsuo TAMAOKA, Nagoya University

Xiangjuan CHU, Tianjin Foreign Studies University

### Abstract

The present study investigated how verbal semantic/syntactic features affect particle acquisition. A multiple-choice test, which targeted for the proper choice of case particles *-ni* and *-o* in relation to two types of active verbs, was administered to native Chinese speakers learning Japanese with three different proficiency levels divided on the basis of a reading comprehension test. Decision tree analysis was conducted to predict the accuracy of particles by three variables: Japanese proficiency level, two types of active verbs, and case particle types *-ni* and *-o*. Particles used with physical verbs were likely to get more accurate as Japanese proficiency increased, whereas neither particles *-ni* nor *-o* used with spiritual verbs improved regardless of Japanese proficiency. Cluster analysis based on accuracies and *-ni/-o* alternation errors produced four clusters of verbs: (1) those with greatly improved verbs, (2) those with poorly improved verbs, (3) those with large alternation errors from *-ni* to *-o*, and (4) those with large alternation errors from *-o* to *-ni*. These clusters suggest that the delay of *-ni* acquisition is caused by not only insufficient understanding of its causal function, but also recognition failure of *-ni* as the animate case marker.